

## 行為と記述：アンスコムにおける意志行為をめぐって

山口, 誠  
九州大学大学院：博士後期課程：哲学

<https://doi.org/10.15017/1448730>

---

出版情報：哲学論文集. 45, pp.77-95, 2011-10-01. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# 行為と記述

——アンスコムにおける意志行為をめぐる——

山口 誠

## はじめに

エリザベス・アンスコム (G. E. M. Anscombe) は、『インテンション』(Intention 1957) の中で、例えば食卓のリングに関する知識のような観察に基づいて成立する知識ではなく、また伝統的な行為論が拠り所とするような内観によって捉えられる知識でもない、「観察に基づかない知識 (knowledge without observation)」という概念を導入し、観察に基づかざるに知られる出来事の一つとして「意志行為 (intentional action)」を規定した。アンスコムは、周知の通りこの観察に基づかない知識という概念を「膝が曲がっている」という行為者自身の四肢の位置や状態に関する知識を例に用いて説明し<sup>1)</sup>、この概念の解明を通じて意志行為の知としての実践的知識 (practical knowledge) を明確化し、意志行為の構造を解明したのである。しかしこのようにして明確化された実践的知識について考える時に注意すべきなのは、それが、観察に基づかない知識としての意志行為に関する知であると同時に、その行為によってひき起こされた外界の事実に関する知にもなり得るといふこ

とである。<sup>2)</sup> 例えば行為者がポンプで水を汲み上げるといふ行為を行う時、実際ポンプによって水が汲み上がっていないならばならず、かつ行為者はそのことを一つの事実として知っていなければならない。そうでなければポンプで水を汲み上げているといふ意志行為に関する知、即ち実践的知識も成立したりはしないだろう。つまり実践的知識は、観察に基づかない知識と密接に関わるのと同時に、多くの場合意志行為によって引き起こされた事実に関する知識とも一致するのである。ならば実践的知識は、観察に基づかない知識と密接に関わる知識であるにもかかわらず、なぜ外界についての知識にもなり得るのだろうか。これはアンスコムにおける実践的知識の概念をいかに捉えるのかといふことに関わる重要な問題である。本稿では以上のような問題意識の下、アンスコムにおける実践的知識の解明を、‘レイヴァード・ヴェルマン’ (David Velleman) ‘リチャード・モラン’ (Richard Moran) という二人の論者の、特にモランの見解を踏まえつつ行っていく。

アンスコムは『インテンション』において、実践的知識が成立する際に「記述 (description)」が重要な役割を果たしていることを指摘した。即ち彼女によれば、行為者は常に一定の記述の下に自らの行為を知ることになる。例えば犬小屋を作るといふ意志行為が行われた場合は「犬小屋を作る」といふ記述の下に、窓を開けるといふ場合は「窓を開ける」といふ記述の下に行者は自らの行為について知るのである。これを踏まえて、いま挙げた二人の論者の見解の相違点をここでさし示すならば次のようになる。即ちヴェルマンは行為者がその下に自らの行為を知るところの記述に、加えて、行為者側のコミットメントが存在したのかどうかで単なる事実に関する知なのか意志行為に関する実践的知識なのかが決まると考えておられるのに対し、モランは記述そのものによって、単なる事実に関する知なのか実践的知識なのかが決まると考えており、この点に両者の違いがあるといえよう。更に、ここでは指摘するだけに止めるが、後に確認するようにこの両者の違いは先の四肢に関する観察に基づかない知識を実践的知識として認めるのか否かと問うた時、より明確化することになる。

実はアンスコムにおける実践的知識を、われわれはある種の「理論的知識 (theoretical knowledge)」へと還元させて解釈することが可能である。<sup>3)</sup> そしてこの解釈が可能なのは、四肢に関する観察に基づかない知識を実践的知識として認めた時で

あるといえよう。というのも、彼女も述べているように四肢に関する知識は、確かに観察に基づくことなく知られるが、<sup>4)</sup>「膝が曲がっている」という例からも分かるように、たとえ自己自身のものであればあれ一つの事実命題としてもそれは理解され得るからである。<sup>5)</sup> 実際に彼女は「意志の表現 (expressions of intention)」を「予言 (prediction)」という共通の概念の下に「命令 (command)」や「予測 (estimates)」、「預言 (pure prophecies)」と同列に規定することができると考えている。<sup>6)</sup> 即ち彼女は「私は病気になるでしゅう」という予言と「私は散歩に出掛けるでしゅう」という意志の表現の違いを、前者が未来に関わる言明であり、後者はそうではなく現在の心の状態の表現であると、直観的に説明することを退けているのである。<sup>7)</sup>

このようなテキスト上の解釈と相俟って、ヴェルマンの場合は、実践的知識をある種の理論的知識と考え、その上で実践的知識と単なる事実に関する知識との違いを行為者のコミットメントの有無に見出す。即ち理論的知識と実践的知識、つまり彼によれば、単なる事実に関する記述の下に知られることと意志行為に関する記述の下に知られることとの間に違いが生じないならば、他の要素即ち行為者側のコミットメントが実践的知識の成立のために要請されることとなる。一方で理論的知識はもちろん実践的知識も、いわゆる外的世界の事実に関する知として包摂されるが、その上でそのような知としての実践的知識がなぜ単なる事実ではない意志行為の知となり得るのかということ考えた時に、行為者のコミットメントが要請されることとなるのである。そして後述するように、この場合は四肢に関する知識は実践的知識と捉えられていると考えてよい。<sup>8)</sup>

他方モランは、先のテキスト上の解釈にもかかわらず、意志行為に関する記述の下に知られる実践的知識を単なる理論的知識とは考えず、両者の違いを純粹に記述の違いとして考える。即ち意志行為に関する記述と単なる事実に関する記述は異なるのであり、従ってその下に知られるものとしての実践的知識と理論的知識との違いはこの記述の違いとなって現れるのである。そしてこれも後述するように、この場合は四肢に関する知識は実践的知識とは捉えられていない。

以上が両者の見解の相違点であるが、ヴェルマンの場合は実践的知識の成立する条件として行為者のコミットメントを挙げる点で、モランの場合は四肢に関する知識を実践的知識とは考えない点で、両者はアンスコムをいわば乗り越えたものとなっている。その意味で彼らによる実践的知識の概念はアンスコムのものとは異なる独自のものともいえよう。しかしヴェルマンの場合は実践的知識をある種の理論的知識と捉えることも可能だという点で、モランの場合は実践的知識の成立に際して記述の果たす役割を重視するという点で、その基本的姿勢はアンスコムのものに立脚しており、彼女の実践的知識を理解する上で大きな手助けにはなるだろう。本稿の議論はモランの見解を踏まえるものではあるが、にもかかわらずヴェルマンの見解をも念頭に置くのは、ヴェルマンの議論で生じた問題に答えるという意味でモランの議論の意義を明確化するとともに、逆にモランの議論において生ずる問題をヴェルマンの議論によって明確化するためである。

ここでは先ず実践的知識をある種の理論的知識と捉えるヴェルマンの見解を紹介し、その問題を指摘する（第一節）。その問題を受けた形でモランの見解を紹介し（第二節）そこから更なる問題を指摘した上で（第三節）、モランの見解からその更なる問題に対処し得る可能性を見極めることとしたい（第四節）。

## 第一節 理論的知識としての実践的知識

冒頭でも述べたように、ヴェルマンは実践的知識を理論的知識へと還元させる形で説明しようとする。彼の議論は、後述するようにアンスコムのもを乗り越えることにはなるが、実践的知識をある種の理論的知識として捉えようとする点で彼女と同じ方向性をとるものではある。

ヴェルマンによれば「行為者が自らの行為を完全に理解するためには、何が彼の意図をひき起こしてそれを遂行したのかを、行為者本人が理解していなければならない<sup>19)</sup>」。そしてここで、行為者の意図をひき起こすものとして考えられているの

が「動機 (motive)」や「期待 (expectation)」である。つまり「行為者は自らの行為をそれ自体を自分の動機とそれを遂行するだろうという期待の所産として理解する」のである。この点でヴェルマンの議論は、アンスコムのもと基本的にその方向性を同じくする。彼女においても動機 (そして期待) は重要な役割を果たしており、いわば「動機を述べるといことは行為をこの光の下で眺めよ」ということなのである<sup>[1]</sup>。

「ここから更にヴェルマンは、行為遂行の際に行為者には当然ながら複数の動機や期待が存在すると考える。その上で行為者がそれら諸々の期待の中の一つを「あの期待 (that expectation)」とつづ「選り出す (prefer)」のだけということをヴェルマンは指摘するのである。ここにおいて動機や期待は例えば「あの期待」として行為者によって選り出される任意のもの (optional) であり、実践的知識はいかなる期待を行為者が選り出したのかを知ることとして説明される。即ち実践的知識について理解するためには、いかなる期待を彼が選り出したのかを検討すればよい<sup>[2]</sup>。ヴェルマンによれば「動機」や「期待」のようなものを行為者が内省的に (reflective) いかに理解するのかということが、実践的知識の理解へと繋がることとなるのである。

従って実践的知識は「あの期待」「あの動機」を選り出すとつづある種の選択可能性として理論的・思想的に説明されることとなる。ヴェルマンがアンスコムとは異なった路線をとるのはこの「選択可能性として説明される」という点においてである。即ちアンスコムの場合には、動機や期待に関する行為者側の選択までは考慮されない。それゆえ、そのような動機や期待に基づいて意志行為が行われても、意志行為に動機や期待を内省的に選り出すという意味での行為者側のコミットメントを見出すことは難しく、その結果意志行為は未来の予測などと同じくあくまで世界で生起する事実として扱われるに止まる。逆に言えばヴェルマンは、アンスコムにおける意志行為のこのような問題を新たに乗り越える形で以上の見解を提示したともいえよう。ヴェルマンによれば、実践的知識が成り立つのは、動機や期待といった行為者の理論的・思想的な要素が働き、なおかつ行為者がそれらの要素を選択できるからこそなのである。

このようにヴェルマンの議論は、確かにアンスコム議論を乗り越えてはいるが、彼女の議論においても見出し得る「実践的なものはある種の理論的なものである」<sup>(15)</sup>という解釈上の路線を継承しつつ、実践的知識の成立条件を行為者の思念的な動機や期待に関わらせる形で新たに説明したという点で、その功績は大きい。しかしヴェルマンの議論はそれゆえにいささか極端であり、そのようにして説明された実践的知識に関して重要な問題をひき起こすことになる。

ジョージ・ウィルソン (George Wilson) はヴェルマンと同じ立場に立ちつつも、彼の議論において生ずる問題を次のように指摘している。

要するに、行為者は自らが追求しようとする実践的な選択肢を選ばなければ、或いは選ぶまでは、自分が何をしようとしているのかを予告することはできない。そして行為者の選択の基盤となるものはその予告を実証するような証拠を持ち合わせていないのである。<sup>(16)</sup>

ウィルソンが指摘するのは、ヴェルマンのように期待や動機といった要素の「選出」を強調するならば、実践的知識の知識としての成立が危ぶまれることになるのではないかと、ということである。確かに、期待や動機といった意志行為における思念的な要素がアンスコムにおいて重視されているということとを念頭に置くなれば、ヴェルマンの路線はアンスコムをある程度踏襲しているという意味でも決して間違っていない。

しかしウィルソンも述べているように、実践的知識が「選出」によって説明されるならば、その選出しが行為者本人の行為遂行を実証的に予告するような証拠を持たない以上、知識としての成立可能性も疑問となる。アンスコム自身も述べているように、「ひとがそのようにして自らの行為を照らし出す光が真なる光なのかどうかという問いは、紛れもなく難しい問いなのである」<sup>(16)</sup>。

## 第二節 記述レベルで成立するものとしての実践的知識

本稿冒頭でも述べた通り、アンスコムは実践的知識の成立において記述の果たす役割の重要性を指摘した。モランは、このようなアンスコムの指摘を踏まえた上で、前節でとり上げたヴェルマンの議論のように実践的知識を理論的・思念的知識へと還元させるのではなく、純粹に「記述」のレベルで捉えようとする。本節においてはこのようなモランの解釈を、ヴェルマンの議論において生じた問題点も念頭に置きつつ検討していくこととしたい。

モランは、アンスコムが記述の果たす役割を重視したことを踏まえ、次のように述べている。

実践的知識の原因たるところのもの (the ascription of practical knowledge) は、意志的な脈絡 (intentional context) を創出し、かつその下で行為が理解されるところの記述 (description) に依存するだろう。<sup>(15)</sup>

この一節を述べる時、モランが念頭に置いたのはアンスコムの次のような指摘である。

(a)形式上、出来事の記述が実現された意図の記述であるようなタイプであり、(b)その出来事が現実には(われわれの基準に従って)意図の実現であった場合、実践的知識の本性に関してトマス・アクィナスによって与えられた説明が成立する。つまり「知られる対象に由来する」「理論的 (speculative)」「知識とは異なり、実践的知識は」「それが理解している当のものの原因」である。このことは、実践的知識が様々な結果を生み出すための必要条件であると見なされるということ、或いはこれこれの方法でしかじかのことを行おうと考えることがこのような条件であるということ以上のこと



を意味している。つまり実践的知識なしには生じてくることは——意志の実現という——記述の下に入らず、われわれが探求してきたのはこの記述の特性のことなのである。<sup>(1)</sup>

モランによれば、われわれはアンスコム以上のような指摘を次のように解釈することができる。即ち、実践的知識の対象となるものは、様々な出来事、要するに行為者によってひき起こされた単なる出来事ではなく、行為者本人がまさにそれを行ったという事実、(fact)なのであると。

例えば行為者がポンプのレバーでカッシャンカッシャンと音をたてているような出来事について考えてみよう。モランの見解に従えば、この出来事が意志行為となり得るのは、行為者が「ポンプのレバーでカッシャンカッシャンと音をたてている」という記述の下にこの出来事を観察に基づくとなく知っている場合である。もしこのような記述の下に成立する知識を持たなければ、それは意志行為の知としての実践的知識にはなり得ず、従ってこのようにして記述された出来事は意志行為にはなり得ない。つまりその出来事は、われわれが為した、ことではなく、われわれによってひき起こされた、ことであり、当然その出来事に関する知識は、例えば「ポンプのレバーによってカッシャンカッシャンと音が鳴っている」というような理論的知識の範疇に入るものであつて実践的知識ではない。ある出来事に関して実践的知識が成立するか否かは、それ相応の記述の下に意志行為を知っているのかに（のみ）委ねられており、知っているならばそれは実践的知識であり、その相応の記述の下に知らないならばそれは理論的知識なのである。モランが実践的知識の成立する際に記述を重視した理由もこの点で明らかである。

ヴェルマンの見解に基づくならば、実践的知識は行為者の思念的な知識に基づくものであり、それは行為者が諸々の期待・動機を「あの期待」「あの動機」として選択した時に成立するものであつた。この場合実践的知識は理論的知識へと還元され、その上で両者を分かちつものは、「あの期待」「あの動機」として行為者によって選択されたことを、行為者本人が知って

いるか否かということになる。つまりヴェルマンの場合は、実践的知識の成立する条件としてある特定の記述の下にその出来事を知るということは含まれているものの、それだけではまだ理論的知識と実践的知識は明確には区別されていないといえよう。これに対してモランの場合、実践的知識が行為者による記述レベルで成立すると考えることによって、その記述の下に知ることが即ち実践的知識だということになる。行為者はある特定の記述の下に自らが関わった出来事を知り、もしその記述が行為者本人が行った事実に関するものであれば、その時点でその出来事に関する知は理論的知識ではなく実践的知識であることが決定されるのである。それゆえモランにおいては、ヴェルマンにおいて問題となった期待や動機に関する「選び出し」を検討する必要はない。行為者がその下に出来事について知る記述によって、それが理論的知識なのか実践的知識なのかは決定され、その記述の下に知ることが即ち実践的知識の成立へと通ずる。要するに選び出しの証拠を持ち合わせないことによる実践的知識の成立危機がここで回避されているのである。

ただこのような考えをとるならば、モランの議論においては四肢に関する知識は実践的知識とは見なされ得ないことになる。これゆえにモランの議論は、ヴェルマンによる常識的な路線からは逸脱するという点において、そしてアンスコムの議論との整合性という点において、少なからず問題を孕むこととなるといえるが、次節ではこうした点について検討していく。

### 第三節 アンスコムの議論に潜む一人称性の問題

くり返すように、アンスコムは観察に基づかない知識の例として四肢に関する知識を挙げ、意志行為を観察に基づかずに知られる出来事の一つとして規定した。彼女によれば、四肢の位置や運動に関する知識のみならず、意志行為に関する全ての知識もこの観察に基づかない知識という概念の下に包摂されることとなる。<sup>(18)</sup>

このようにアンスコムにおいては四肢に関する知識も、実践的知識も、観察に基づかない知識として同じ概念の下に扱われており、この点でわれわれは両者を同じものとして考えることができるが、前節の最後でも述べたようにモランは四肢に関する知識を実践的知識と見なすことはない。彼はその理由を次のように述べている。

何であれ、当人（行為者）の身体的位置を観察に基づくことなく知るといふのは、アンスコム自身の説明において、例えば当人がこれから行おうとすること（plan）を直接知るといふた実践的予知（practical foreknowledge）のようなものとは基本的に全く異なっていないなければならない。というのも、根本的には特定の感覚とは直接的・独立的であるとはいえ、このような身体的把握が「思念的知識（speculative knowledge）」となる場合を残すからである。ここで知識の対象となるのは依然として「把握された対象に由来する（derived from the object known）」ものであり、それはいまだに個々の事実への判断と述べられる方が適切である。たとえ直接的であり観察された証拠に基づくものではないにせよ、膝が曲がっているという主張は依然として何か膝が伸びているという事実によって訂正される。従って原初的な身体的な行いへの把握と深く関わるにもかかわらず、そして身体的位置に関する知識も実践的知識も「観察に基づかない」という意味に基づくといわれ得る事実にもかかわらず、その身体的位置に関する直接的な知識はアンスコムが「実践的知識」によって意味したものの例にはなり得ない。<sup>10</sup>

ここで例として拳がっている「膝が曲がっている」という四肢の状態に関する知識の場合、四肢に関する知識という点では同じでも、それは「膝を曲げる」のような意志行為に関する知識とは明らかに異なるものである。なぜなら、確かに前者はある一定の記述の下に知られる観察に基づかない知識であるが、その「膝が曲がっている」という四肢の状態に関する知識はあくまで把握される対象に関する個々の事実判断に対応する理論的・思念的知識であるに止まり、意志行為であるまで

はいえないからである。四肢に関する知識は、観察に基づかない知識にもかかわらず、また「膝を曲げる」のように意志行為に関する知識として成立する場合があるにもかかわらず、四肢の状態に関する知識の場合のように意志行為に関する実践的知識とは見なし得ない可能性を残すものである。

しかしながらひとたび人間の行為が成立する時、世界に生起する事実であるための「三人称性 (third-person)」と「一人称性 (first-person)」も当然そこに要求されざるを得ないというのも一つの事実である。というのも行為遂行によってひき起こされた事実は他ならぬ行為者本人によるものであり、そういった行為によって生み出された事実には当然行為者自身が深く関わることとなるからである。<sup>(23)</sup> 具体的には、意志行為が生み出されるためには、いわばその行為を發動させるものとしての行為者、自身の期待なり動機なりが当然ここで要請されてこざるを得ない。しかしモランのように実践的知識の成立を四肢に関する知識を除外した記述レベルで考えるのならば、そのような一人称性が欠如してしまうのではないかという重大な問題が生ずることになる。なぜなら、四肢に関する知識を除外するということは理論的・思想的要素を伴う期待なり動機を除外することへと繋がるからである。

われわれは第一節でとり上げた、行為者の期待や動機という思念的な (speculative) 要素を実践的知識の成立のために重視するヴェルマンの議論を、ここで想起しなければならない。即ち行為の三人称的な事実内に在する行為者側の一人称性という観点から見た場合、行為者本人の期待や動機を重視し、行為者側のコミットメントを積極的に導入する彼の議論をわれわれは全く無視できなくなるのである。もちろん彼の説明は行為者側のコミットメントを提示するということによってアンスコムを乗り越えるものとなり、その意味で行為者側の一人称性の問題は彼女の議論の中に本来的に備わったものでもある。とはいえ彼女も、意志行為成立の際に行為者本人の期待や動機が重要な役割を果たしていることを認めることを考え合わせるなら、記述の果たす役割を重視するあまり、四肢に関する知識を実践的知識であると考えたのを拒否することによって、意志行為を發動させる原因としての期待や動機をも拒否することになりかねないモランの議論も別の意味で極端だといわざ

るを得ない。

果たしてわれわれは、この三人称的な事実に関する行為者側の一人称性の問題を、モランの立場に立った上でいかに考えればよいのだろうか。

#### 第四節 「私が行つこと」と「起つたこと」

前節でも述べた通り、確かにモランは四肢に関する観察に基づかない知識を実践的知識とは見なさなかつた。しかし他方、彼は四肢に関する観察に基づかない知識を実践的知識と関わらせる形で解釈し直そうとする。本節ではこの彼の議論を検討し、そこからヴェルマンとは違つた行為の新たな地平で、アンスコムの行為論における解釈の方向性を示すこととしたい。モランはアンスコムの次のような一節に注目する。

目を閉じた状態でインクの切れたペンを用いて文字を書き続けることもあるだろう。また同じく目を閉じた状態で、用紙をはみ出して机の上まで書き続けてしまつたり、或いは既に書かれてしまつてある文字列の上に更に文字を書いてしまうこともあるだろう。ここでは目は大いに役に立つ。しかし特に、これこれを書くという彼が為している肝心のことは目の助けがなくとも為される。だから目を閉じていても彼は自分が書いていることを知っているのである。しかし目は、書くものが実際に読み得るような状態になっていることを彼が確信する手助けとなるだけである。以上のような事実にもかかわらず「私は生じていることを行つのだ」とどうして言えようか。知ることに関して二つの方途があるならば、二つの異なつた知られる対象がなければならぬ。<sup>⑫</sup>

モランはここで「知ることに關して二つの方途があるならば、二つの異なった知られるものがなければならぬ」という箇所に注目し、「ここから知識の二つの形態を「私が行うこと」(What I do)に關する知」と「起こったこと」(What happens)に關する知」に區別する<sup>(22)</sup>。そしてその上で彼は次のように述べる。

仮に私が何かした時に生じるであろうことに關して、もしそれを經驗的に知るとすれば、そして觀察に基づいて（もしくは他の方途で）Zは私がABCを行った結果生じるものなのだとこのことを知るならば、その時私は他の種類の知識、即ち私はZを行つてゐるのだ、という知識を得ることができる。そして、その拠り所としてゐるところの意志行為がZは私がABCを行つた結果成り立ち得るといふ觀察に基づく知識をまさに前提しているにもかかわらず、この知識は觀察に基づかないものである。従つて「私が意志的に行つてゐる」といふ記述の下で成り立つ限りにおいてのみ、觀察に基づかずに知られるものの範圍は「起こったこと」を含むのである<sup>(23)</sup>。

四肢に關する知識は、確かに觀察に基づかないが理論的・思想的知識として解釈され得、この点でこの知識は事實に關する。つまり「起こったこと」に關する知識へと還元される可能性を残す。そしてモランも述べてゐるように「起こったこと」の知識が実践的知識の前提ならば、四肢に關する知識も以上から実践的知識の前提と考えられてよく、少なくともこの点で先の行為者の一人称性という問題に關してヴェルマンとは違つた形ではあれ何らかの説明の糸口が開けることになる。

われわれは、このモランの引用においては「起こったこと」に關する觀察に基づかない知識を四肢に關する知識に置き換えて理解することができる。もちろん四肢に關する知識は、それ自身が実践的知識とは見なされないものの、しかし決してその成立に何ら寄与しないというわけでもない。むしろモランも述べるように、それが実践的知識の成立する前提として捉えられるならば、その成立する際に何らかの形で四肢に關して觀察に基づくことなく知つていなくてはならないともいえる。

ポンプで水を汲むという意志行為が行われる場合、行為者は例えばレバーを引けば水が汲み上がるとか手を上下に動かせばレバーが動くなどということを知っておく必要がある。そしてこれらは、紛れもなく「起こったこと」に関する知であり、(因果的に) 遡れば四肢に関する知のレベルにまで達し得る。つまり行為者は、自らの四肢に関する状態や位置という何らかの身体図式を踏まえた上で自らの行為にとり掛からねばならない。手元にレバーやポンプそのものがないならば、ポンプで水を汲むという意志行為そのものが不可能となる。行為遂行の際、行為者は自らの四肢の状態や位置も含めてとり巻く状況について予め知っていなくてはならないのである。

以上のように考えるなら、第三節から問題になっている意志行為における一人称性の問題についても、われわれは何らかの解決の糸口を得ることにはなる。モランの議論においても四肢に関する知は、実践的知識とは見なされないにせよ、実践的知識の成立に大きく寄与したものとなっている。つまりわれわれは実践的知識の成立のための前提として期待や動機といった自己に関する思念的な知識へと通ずる四肢に関する何らかの知識を持たねばならないのである。即ち記述のレベルで実践的知識が成立するとしても、モランのように考えるならば、われわれはそこに行為の一人称性が成立する可能性を見出すことができることになる。しかもここで考えられる一人称性は、ヴェルマンのような内省的なものとは異なつた様相を呈する。

モランのように考えることは、行為者をとり巻く様々な状況、特に彼の四肢に関する、位置・場所、更には知覚的な要因などと不可分となつて実践的知識が決定される可能性を残す。なぜなら実践的知識が四肢に関するものをも含めた「起こったこと」に関する知識を前提として成立する以上、実践的知識は「起こったこと」に関する知識にある意味で束縛されて成し得ないからである。ポンプで水を汲むという例の場合、行為者は自分の側にポンプなりそのレバーなりがあるという事実を、そしてレバーを引くことによって水が汲み上がるということが因果的にひき起こされるのだという事実を、更にその他諸々の事実(例えば水槽に水が溜っている等)を知っていなければならない。

本稿冒頭で問題となった「実践的知識は、観察に基づかない知識と密接に関わる知識であるにもかかわらず、なぜ外界についての知識にもなり得るのだろうか」ということも、以上から説明できる。むしろ実践的知識は、外界の知識とも一致していなければ成立し得ない。換言すれば実践的知識の成立は、外界の知識が前提となることが条件となるともいえよう。

行為者の一人称性は、決して彼の置かれた脈絡や状況を重視することなく、まさに内在的・思想的に帰結するのではない。ここにおいて行為者の一人称性は彼の身体図式とも密接に関わりつつ行為記述において既に現れるべきものである。即ち行為記述の行われる時点でその一人称性はまさにわれわれの前に現れ、それは行為者の置かれた脈絡や状況の下に決定されるべきものである。

## おわりに

最後に、本稿における検討の結果なお残る問題を二点、指摘しておこう。

第一点目は、知識の成立可能性に関して「実践的知識の成立根拠を行為者による記述のレベルで考える」だけでは、われわれはヴェルマンの議論で生じた危険から完全には逃れ得ないのではないか、ということである。意志行為に関する記述の仕方は或る意味で行為者本人にのみ委ねられており、従ってその記述の下に知られる実践的知識はいわゆる内在主義に陥る危険を免れ得ないからである。つまりモランのように記述レベルで実践的知識の成立根拠を考えても、事実をいかに記述するのか行為者本人に委ねられている以上、そこに内在主義に陥る危険性という知識としての成立根拠に関する問題を残すからである。

第二点目は、モランの議論においては行為者の一人称性や自己知、或いは「行為者性 (agency)」の説明に関して、やはりなお不十分な点が残るのではないかということである。確かに第四節で検討されたようにモランの議論においてもわれわれ



れは、実践的知識における四肢に関する知識の意義を認めることによって、行為の一人称性の成立可能性をヴェルマンとは違った形で認め得るようにはなった。しかし他方、くり返すように、モランの議論は単なる三人称的事実なのか意志行為による事実なのかの違いというのは、記述の分析を通して知られるというものであった。そこでもし記述の問題に還元してしまつたならば、意志行為に関する知も、そこにおいてたとえ四肢に関する知識の意義が認められようとも、実践的知識の成立は記述の問題として言語的に処理され、行為を発動させるものとしての動機や期待が一体どこで関わるのかが不明確になる。

これらの問題は、本稿において、モランが重視した記述についての更なる具体的な検討がなされていないことに起因するものである。第四節でも指摘したように、彼は「起こったこと」としての四肢に関する知の意義を、ヴェルマンとは別の形で認めている。そしてこれによって実践的知識は、行為者をとり巻く様々な状況、特に彼の四肢に関する、位置・場所、更には知覚的な要因などと不可分となって決定される可能性を残し、彼の議論が内在主義的となることを回避する可能性をわれわれは見出すことができた。そしてここから、特に第一点目の問題に関して、行為者がその下に実践的知識について知る記述は単に行為者によって一方的なものとして成立する、即ち出来事が行為者の内在的な信念のみによって記述されるわけでは必ずしもなくなる<sup>24</sup>ともいえよう。更にそこで表される記述の性格を更に検討することによって、記述の重要性を強調しつつ何らかの形で行為者性も説明し得るといふ道も開けるのではないだろうか。

#### 引用参考文献

- G.E.M. Anscombe, (1957), *Intention*, second edition, Harvard University Press (邦訳：菅豊彦訳 (一九八四)、『インテンション——実践の考察——』産業図書)
- , (1981), 'The First Person', *The Collected Philosophical Papers of G. E. M. Anscombe Volume Metaphysics and the Philosophy of Mind*, Basil Blackwell · Oxford

- Tyler Burge, (1977), 'Belief de re', *The Journal of Philosophy*, Vol. 74
- Donald Davidson, (1980), *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press. (邦訳：服部裕幸、柴田正良訳、(一九九〇)『行為と出来事』、創思書房)
- Keith Donnellan, (1963), 'Knowing What I Am Doing', *The Journal of Philosophy*, Vol. 60
- Rosalind Hursthouse, (2000), 'Intention', edited by Roger Teichmann, *Logic, Cause & Action*, Cambridge
- John McDowell, (1984), 'De Re Senses', *The Philosophical Quarterly*, Vol. 34
- , (1998), 'Virtue and Reason', *Mind, Values, and Reality*, Harvard University Press. (邦訳：荻原理訳、(二〇〇八)『徳と理性』、『思想』、青波書房)
- Richard Moran, (2004), 'Anscombe on "Practical Knowledge"', edited by John Hyman and Helen Stewart, *Agency and Action*, Cambridge
- David Velleman, (1985), 'Practical Reflection', *The Philosophical Review*, XCIV, No. 1
- George Wilson, (2000), 'Proximal Practical Foresight', *Philosophical Studies* Vol. 99
- 菅豊彦、(一九九三)『志向性と外的世界』、森俊洋、中畑正志編、『プラトンの探求』、九州大学出版会
- 、(二〇〇七)『アリストテレスのエウダイモニアについて』、『哲学論文集』、第四十三輯、九州大学哲学会
- 黒田亘、(一九八三)『知識と行為』、東京大学出版会
- 新島龍美、(一九八八)『第5章 行為』、根井豊、新島龍美編、『人間と文化』、九州大学出版会
- 野矢茂樹、(一九九九)『哲学・航海日誌』、春秋社

## 注 釈

- (1) Anscombe 1957, p.13
- (2) 「アンスコムは意志行為としてその知としての実践的知識の成立に際して観察の果たす重要性を見落としているのではないか」という批判がしばしばなされる点がある。これについては野矢(1999, pp.248-249)を参照。

- (3) この点については異論があるかもしれない。もちろん実際にそうであるのか否かの判断は慎重な検討の結果なされなければならないが、さし当りヴェルマンやモランはアンスコムにおける実践的知識を理論的知識へと還元して解釈していることが読み取れる。このことはいずれ後述することになるが、本稿も彼らに倣うこととする。
- (4) Anscombe 1957, p.13
- (5) この点の解釈は特にモランにおいて顕著である。詳しくは第三節を参照。
- (6) Anscombe 1957, p.2
- (7) Anscombe 1957, p.2
- (8) 必ずしもヴェルマンは四肢に関する知識を実践的知識として捉えることができるが、四肢に関する観察に基づかない知識がある種の理論的・思念的知識として理解できるということ、そして彼自身が実践的知識のある種の理論的知識と捉えているという前述のことを考え合わせるなら、そのような見通しを立て得る。
- (9) Velleman 1985, p.58
- (10) Velleman 1985, p.58
- (11) Anscombe 1957, p.21
- (12) Velleman 1985, p.58
- (13) Velleman 1985, p.33
- (14) Wilson 2000, p.4
- (15) Anscombe 1957, p.21
- (16) Moran 2004, p.54
- (17) Anscombe 1957, pp.87-88
- (18) Anscombe 1957, p.50
- (19) Moran 2004, p.48
- (20) 「行為によって生み出された出来事には当然行為者自身が深く関わる」とわれわれが述べる時の関わり方として行為者の一人称

的な・心理的なものは当然考えられてよい。これについてはフネマン (1963, p.402) を参照。

(21) Anscombe 1957, p.53

(22) Moran 2004, p.51

ただしこの解釈はアンスコムの見解と合致するものではない。上の引用において、彼女は「私が行うこと」と「起こったこと」を区別したりはせず、むしろそのように区別して論じることを批判してさえいるからである。

(23) Moran 2004, pp.50-51

(24) 「*de re*」念頭にあるのは、次のような種類の信念である。記述は次の二種類の信念、即ち「*de dicto* 信念 (言表についての信念)」に基づいている場合と「*de re* 信念 (事象についての信念)」に基づいている場合があるとわれわれは考えることができる。*de dicto* 信念と*de re* 信念は、前者が命題における信念 (belief in a proposition)、後者が何かこれであるというものに関する信念 (belief of something that it is such and such) として文法的に区別される。両者における重要な違いは、*de dicto* 信念が行為者 (話し手) をとり巻く状況を考慮する点となく成立する点に反対して、*de re* 信念はそれではない (Burge 1977, p.340, 343) ということである。

(本学大学院博士後期課程・哲学)